

Viva Kango

Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society



RCHOKKAIDO

学校法人 日本赤十字学園
日本赤十字北海道看護大学
編集・発行／広報委員会

〒090-0011 北海道北見市曙町 664 番地 1 TEL 0157(66)3311 FAX : 0157(61)3125
HP : <https://www.rchokkaido-cn.ac.jp/>



令 和5年9月8日、本学と北海道北見柏陽高等学校は、高大連携に関する協定調印式を執り行い、高大連携協定を締結致しました。本協定は、大学及び高校が相互の信頼関係に基づき包括的な連携のもと、双方の教育及び研究機能についての交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学教育が求める学生像及び教育内容への理解を深め教育・研究に寄与することにより、双方の教育の活性化を図り、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的としています。

- ① 大学の教員による高校への出張講義
- ② 大学の通常授業への聴講生の受け入れ
- ③ 大学の体験授業・公開講座への受講生の受入れ
- ④ 双方の教職員との合同研修
- ⑤ 教育及び研究についての情報交換及び交流
- ⑥ 大学入学前教育の実施
- ⑦ 地域社会の発展に資すること
- ⑧ その他、双方が協議し同意した事項

赤十字災害救護訓練に 4年生6人が参画

令和5年9月27日～29日の3日間、日本赤十字社北海道支部

において令和5年度赤十字災害救護訓練が行われました。北海道内9病院が札幌に参集し、感染症の発生や多様化する災害救護活動等において、必要な知識・技術を身に付け災害への対応能力の向上を図ることを目的とし対面型で実施されました。

本学からは4年生6名が訓練の演習時の避難者役、傷病者役として参画しました。事前に配布された一人ひとりの傷病内容を把握し、避難所に見立てたエリアにおいて演技を行うことで、各病院の救護班の実動演習に関わることができました。学生は、避難者役を演じながら、避難者として支援者に情報を伝えることの難しさ、避難者としての孤独感も感じました。また、今回は本学の卒業生が各病院の救護班要員として派遣されておりました。演習場面等において、看護師として各病院で活躍されている様子が伝わってきました。

今回の訓練では、出勤現場と現地災害対策本部に見立てたエリアに分かれ、お互いに無線機を使用した実践的なクワロロジーの演習が行われました。学生も演習に入らせていただき、普段使い慣れない無線機を通してお互いの情報を交換する難しさを学び、得られた情報を的確に整理して時系列に記録することの重要性

を学びました。実動演習を踏まえたUSPBCへの入力においては、一人ひとりの避難者情報が記されたシートから確実に情報を捉え、その

情報をシステム内に入力する作業を把握しました。大学では学ぶことのできない最新の災害医療の実際を知る機会となりました。さらに避難所の環境改善を目的としたゾーンング演習においては、避難所と想定された体育館において感染症を踏まえてどのように避難者に入っていたらどうか、発熱者をどう分けるか、要配慮者にどのように配慮するか等を導き出し、その内容についての情報共有がなされました。

本学から参加した学生も各病院の救護班とともにすべての講義・演習に参画し、最初は戸惑いながらも知識をフル活用して災害医療の一端を実践することができました。今回の訓練への参加は、災害看護で学ん



避難者・傷病者役として参画した学生



各病院の救護班とともに赤十字の救護活動と新たな災害対応を学ぶ

いた内容を確認する機会となっただけでなく、赤十字の救護活動の実際と、新しい災害対応の流れについても把握することにつながり、赤十字だからこそ学べる看護を実感する場となったようです。

赤十字避難所演習に 2年生が臨む

RCH Viva Kango

令和5年7月21日から22日にかけて、2年生の選択科目「赤

十字避難所演習」の宿泊型演習が実施されました。本演習は今年が初めての開講で、2年生13名が演習に臨みました。

演習の設定は、停電により情報伝達手段が機能せず、機材・資材・食材は貯蔵してあるもののみ。14時よ

り日本赤十字北海道看護大学体育館に避難所を開設。1000人を収容できる避難所開設の必要性。というもので、本学が毎年実施している「厳冬期災害演習」の夏バージョンです。避難所は大規模災害では容易に起こる停電、ガスストップ、断水、水洗トイレは使用できないという設定です。

演習では最初に最悪の避難所をブルーシート・雑魚寝によって体験しました。硬い床でそのまま眠ることの難しさ、響く足音を把握したうえで、本学のみが整備しているクイック型ボールベッドを展開し、一人ひとりのプライバシーを守るパーティションを展開しました。段ボールベッドによるメリット・デメリットが演習の中から導き出され、今後につながる内容となりました。

トイレ項目では、断水した既存トイレの携帯トイレ化を行い、水が流れなくても普段のトイレを持續運用させました。同時に熱シールによって持續運用を可能とするラップボンの設置を行いました。

食事はすべてハイゼックスならびにアイラップにてカセットコンロ調理を実践しました。普段使いの食材を活用したスープカレー、冷凍牛丼を用いた味変たまねぎ調理を実践し、想像していたよりも美味しく温かい料理が食べられる良さを体感しつつ、こちらも多くの課題を導いていました。

本学に整備されている実践的な災害対応資機材を活用し、学生自身で

実践する宿泊型の演習から得られた成果は大きく、今後につながる内容となりました。



ハイゼックスを使用した夕食作り



クイック型ボールベッドを展開し宿泊

第23回大学祭

Take a step forward

令 和5年6月24日(土)、25日(日)に第23回大学祭が開催されました。今年のテーマは「a step forward」(新たな一歩を踏み出す)として、Covid-19感染症が落ち着いて初の大学祭ということ、そして今回は北見工業大学との合同イベントも新たに加わることから、本学の大学祭の再出発となる2日間になって欲しいという想いを込めました。学生だけでなく、市民の方々も楽しんでいただけるようにヘルスチェックや看護体験コーナーを開設し、看護系大学らしく健康を気遣う内容としました。小さな子供たちは縁日でヨーヨーすくいや射的を楽しんでいました。花火は例年以上の数を打ち上げることができ、学生たちの歓声が聞こえました。2日間



例年よりも多く打ち上げた743発もの花火に大歓声

で1,000名を超える来客で賑わいました。

同時企画として本学同窓会事務局による「ホームカミングデー創設記念講演会」を初めて開催しました。ホームカミングデーは、同窓生をはじめ、在学生や教職員などの関係者を大学に招いて歓待するイベントです。旧友や懐かしい恩師と再会し、在学生と親睦・交流を深めていただくため、そして「母校に帰ってきていただきたい」という思いを込めた企画であり、本年創設いたしました。



1期生の中村創さん

卒業生による記念講演として、学部1期生の中村創さんと宮本勝行さんから、学生時代からこれまでの経緯を含めて、現在の活動についてご講演いただきました。卒業後20年経過し、様々な形で活躍のお二方のお話を聞かせていただきました。その後の茶話会では現役生、卒業生、教員とで懐かし話を花を咲かせる交流の場となりました。



ミニオープンキャンパスでは小中学生が看護を体験

大学の企画として、ミニオープンキャンパスを同時開催しました。こちらは小中学生を対象として、看護体験をしていただくというもので、親子で70名以上の方々に参加していただきました。白衣試着会、看護体験演習、人体模型演習も行い、看護に対する興味を持っていただく良い機会になったと思います。

来年は今年以上の大学祭にしたいと思っております。皆様の又のご来場をお待ちしております。

RCH Viva Kango

日本赤十字6看護大学 学生交流会を開催

本 年9月17日、18日の2日間、日本赤十字看護大学の広尾キャンパスにて行われた第13回日本赤十字6看護大学学生交流会に参加してきました。この2日間では、赤十字の看護学生として、赤十字の7



本学からは小野寺優梨奈さんと太西心さんが参加しました

原則の理解を深め、災害看護においてどんな行動が出来るのか、自らの心身を守る行動が出来るのかということを中心として、グループワークを中心に学びました。実際の事例をもとに災害が発生した場合を想定し、避難所で役に立つ、身近にあるものとは何かや身近にあるものをどのように使えて、どんな代用方法があるのかについてグループワークを行い、新聞紙を使って TENT を作成しているグループやサランラップと新聞紙でカーテンを作成しているグループなど、グループワークだからこそ様々な発想が生まれ、応用に繋がられると思われました。自然災害が多い日本で、いつどこで災害が起こるか分からない世の中で少しでも役に立てるように、この機会があり、自分自身も災害について改めて考える良い機会となりました。2日目は日本赤十字社東京都支部職員の若松さんによる赤十字防災セミナーを行い、災害が発生した際の基礎知識について学び、また、若松さんが実際に体験した被災地での様子を教えてくださいました。

そして、昼食には非常食を食べました。非常食は様々な種類があり、

量が多いため、一袋で十分な量でした。食べる際に、味が濃い部分、薄い部分とばらつきがあったという印象を持ちました。また、クラッカーやビスケットも食べましたが、ばさついているため、水分が必要だと思いましたが、そのため、水を常備しておくことが重要だと感じました。そして、1人が3日間生きていくうえで必要な水の量は9ℓであり、非常食は9食です。災害が起こる時期や場所によっては、毛布の用意も必要です。そのため、日頃から災害バックを用意し、すぐに手に取って、素早く逃げられるのが重要だと思いました。私達は北海道に住んでいるため、寒冷地での災害についての知識を伝えてきました。様々な地域の災害時の対応、また、今の災害時の対応で足りないことは何かを、話し合いました。今回の交流会を通して、さらに災害について知識を増やし、また常日頃から防災について、考えていきたいと思います。そして、それぞれの6大学の特徴や多くの人と交流することができ、人との輪、看護大学の輪を広げることが出来たと思います。



会場となった東京都渋谷区の広尾キャンパス

10月上旬、1年生が初めての 臨地実習を終えました！

病 院実習3日間・学内実習2日間の日程で、学生6〜7名で1グループとなり、北見赤十字病院の8つの病棟に分かれて行いました。基礎看護学実習Ⅰは、実際に患者さんが治療・療養する臨床の現場において、患者さんとのコミュニケーション、看護師へのシャドウイングを通して、患者さんの療養環境や生活、看護師の役割や患者さんとの関わり方、援助の方法を学びます。実習開始時には荒川穰二院長と佐々木敦美看護部長から温かな問いかけと、エールをいただきました。

はじめは「患者さんと上手くコミュニケーションできるかな」「実際の現場ってどんな感じだろう」などと不安や緊張を抱え、なかなか自分からコミュニケーションをとることができず、話すことも憚らない自分への戸惑いや自らの力の無さを感じていました。が、訪室するたび

に笑顔で迎えてくださる患者さんや、忙しいなかも患者さんと真摯に向き合う看護師と接することにより、不安や緊張は次第に薄れ、患者さんや看護への興味・関心が深まっ



臨地実習で学んだことを各グループごとに発表

えて、常に患者さんのことや次の行動を考えながら動いている看護師の姿からは、看護師のイメージをぐっと広げ、自分の看護観や看護師の理想像がより明確にできていました。実習最終日の全体会では、学んだことを全員で共有することもできました。

1年生の皆さん、これから4年間の大学生活や実習も、今回の体験を活かし一緒に励んでいきましょう。みなさんの夢が実現するよう応援しています。

日本災害看護学会 尾山教授が功労賞を受賞

RCH Viva Kango

成 人看護学領域の尾山とし子教授が9月に開催された日本災害看護学会にて功労賞を受賞されました。尾山教授より受賞にあたりご寄稿を頂きました。

日本災害看護学会は、1995年1月の阪神淡路大震災を機に設立されました。設立25年を迎えた本年、功労賞を賜りましたこと心から感謝申し上げます。

私が災害看護に携わるようになったのは、赤十字の国際救援に始まります。1985年にタイ・カンボジア難民医療救援、1992年にアルメニア地震救援で活動しました。救援活動は、私の人生に大きな影響をもたらしました。それは、内戦や自然災害によって大きな不幸に遭い、もう立ち直れないと思うほど辛い目



功労賞を受賞された尾山とし子教授

にあつても人は他を思いやり、やがて自ら立ち上がる力を持つという事実でした。むしろ、逆境こそが人を強くするのだと感じました。また、私にとって国内初の救援活動となった東日本大震災でも、被災された人々の強さと優しさに感銘を受けました。これらの経験を通して私は、看護師としてではなく、一人の人間として災害に遭遇した人々に向き合う姿勢こそが救援には必要なのだと思うようになりました。

国内外の救援活動によってさらに強化されてきました。そんな折、阪神淡路大震災が起こりました。この大震災に代表されるように、平成時代30年間の日本は数々の災害に見舞われました。特に日本の災害医療の大転換となったこの大震災を機に、赤十字の看護大学に所属する有志の教員数名で「赤十字災害看護研究会」を立ち上げました。赤十字は、災害時の国内外の救援において多くの経験の蓄積がありながら、それらを世に出すことが不得手でした。そのため、この研究会から一つでも多くの活動報告や研究報告を赤十字として世に出そう、未来につながる学生達に語り継ごうと努力してきました。

今回の受賞は、災害看護と向き合う姿勢を教えてくれた被災者の方々、今まで細々と続けてきた研究活動にご協力頂いた全ての方々のお陰であり、重ねて御礼申し上げます。

最後に、国際救援から約40年、その後も災害看護に寄与できるよう地道に活動を続けて参りました。この場を借りて学生の皆様に「継続は力なり」とお伝えしたいと思えます。



北見赤十字病院での臨地実習

の表情や反応、会話の変化を感じ学ぶことができていました。さらに、患者さんとの会話では、入院前までの生活背景やご家族、ご本人の人物などを知ることで、患者さんにとっていった声かけを行なったらよいか、患者さんの個性に合わせた看護援助とは何かを考えるきっかけとなり、改めてコミュニケーションの重要性を実感しているようでした。加



第25回日本災害看護学会(兵庫県姫路市)